

令和7年度 全国学力・学習状況調査 帯広市の結果について

I 調査の概要

1 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査の対象

- 市内小学校及び義務教育学校前期課程の第6学年の児童
- 市内中学校及び義務教育学校後期課程の第3学年（第9学年）の生徒

3 調査の内容

(1) 児童生徒に対する調査

①教科に関する調査問題[国語、算数・数学、理科]

- ・身に付けておかなければ後の学年等の学習に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
 - ・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等
- ※上記を一体的に問う。

② 質問調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査を実施

(2) 学校質問調査

指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査を実施

4 調査の方式

悉皆調査（対象の全児童生徒が参加）

5 調査の実施日

○国語、算数・数学及び小学校理科
令和7年4月17日（木）

○中学校理科
令和7年4月14日（月）から4月17日（木）までの間で文部科学省が指定する日

6 調査を実施した学校数・児童生徒数

	小学校数（校）	児童数（人）	中学校数（校）	生徒数（人）
全 国（公立）	18,289	946,576	9,291	871,097
北海道（公立）	917	34,220	557	33,474
帯 広 市	26	1,077	14	1,093

※表中の全国及び北海道（公立）の数値は、「令和7年度 全国学力・学習状況調査 調査結果のポイント～北海道（公立）における調査結果～」より抜粋

※表中の帯広市の児童生徒数は、回収した解答用紙が最も多かった教科の解答用紙の枚数で算出

※大空学園義務教育学校においては、前期課程が小学校、後期課程が中学校に含まれています。

7 調査結果の解釈等に関する留意事項

- 本調査の結果については、児童生徒が身に付けるべき学力の特定の一部分であることや、学校における教育活動の一側面に過ぎないことに留意する必要がある。
- 本調査の結果においては、平均正答率等の数値を示しているが、これらの数値のみで必ずしも調査結果のすべてを表すものではなく、中央値、標準偏差等の数値や分布の状況を表すグラフの形状など他の情報と合わせて総合的に結果を分析・評価する必要がある。また、個々の設問や領域等に着目して学習指導上の課題を把握・分析し、児童生徒一人一人の学習改善や学習意欲の向上につなげることも重要である。
- 本市の各教科の平均正答率については、国が公表した整数値と、国から提供されたデータをもとに市教委が独自に算出した小数値で示している。

8 「中学校理科」IRTに基づく調査

- 「中学校理科」の結果は、これまでの正答数・率に代えて、IRT スコア・バンドで表示・返却
- 問題の構成
 - ・ 生徒1人当たり、公開問題10問と非公開問題16問を出題。
 - ・ 公開問題には全日程に共通する問題（6問）と実施日別の問題（4問）がある。
 - ・ 非公開問題は幅広い内容・難易度等から出題され、生徒ごとに異なる問題を解いている。
- IRT スコア・IRT バンド
 - ・ IRT スコアは、IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すもの。
 - ・ IRT バンドは、IRT スコアを1～5の5段階に区切ったものであり、3を基準のバンドとし、5が最も高いバンドとなる。
 - ・ IRT スコア・IRT バンドは、難易度の高い問題に正答していると高めに、難易度の低い問題に誤答していると低めに算出される。

Ⅱ 結果の概要

1 本市の児童生徒の学力の状況の概観

【各教科の平均正答率】

	小学校			中学校		
	国語	算数	理科	国語	数学	理科
全国 (公立)	66.8	58.0	57.1	54.3	48.3	50.3
北海道 (公立)	65.4	55.2	56.3	54.0	46.7	50.5
帯広市	65.8	54.3	58.0	54.9	48.7	51.0
全国差 (昨年度) (理科はR4)	-1.0 (-1.7)	-3.7 (-4.2)	+0.9 (-0.3)	+0.6 (+1.6)	+0.4 (+0.4)	+7 -
全道差 (昨年度) (理科はR4)	+0.4 (-0.8)	-0.9 (-1.4)	+1.7 (+0.1)	+0.9 (+2.1)	+2.0 (+1.9)	+5 -

※全国（公立）：国が公表した小数値

※北海道（公立）：道教委が独自に算出し、公表した小数値

※帯広市：国から提供されたデータをもとに市教委が独自に算出した小数値

※小学校理科については、令和4年度の結果

※中学校理科は平均 IRT スコア

○ 小学校

- ・全国と比較すると、理科が全国平均正答率を上回り、国語、算数で全国の平均正答率を下回った。
- ・全国の平均正答率との差を比較すると、国語、算数ともに差が縮まった。
- ・全道と比較すると、国語、理科が全国平均正答率を上回り、算数で全道の平均正答率を下回った。

○ 中学校

- ・全国と比較すると、国語、数学、理科ともに全国の平均正答率及び平均 IRT スコアを上回った。
- ・全国の平均 IRT スコアとの差を比較すると、理科において+7ポイントであった。
- ・全道と比較すると、国語、数学、理科ともに全道の平均正答率及び平均 IRT スコアを上回る結果となった。

【全国の平均正答率及び平均 IRT スコアを上回った学校数】

○ 小学校

- ・国語で 12 校（令和 6 年度は 9 校）
- ・算数で 7 校（令和 6 年度は 9 校）
- ・理科で 14 校（令和 4 年度は 13 校）

○ 中学校

- ・国語で 9 校（令和 6 年度は 9 校）
- ・数学で 9 校（令和 6 年度は 9 校）
- ・理科で 9 校（令和 4 年度は 8 校）

【帯広市における平均正答率の最も高かった学校と最も低かった学校との差】

○ 小学校

- ・国語で 23.6 ポイント
（令和 6 年度は 28.8 ポイント）
- ・算数で 33.8 ポイント
（令和 6 年度は 22.9 ポイント）
- ・理科で 29.7 ポイント
（令和 4 年度は 26.9 ポイント）

○ 中学校

- ・国語で 15.5 ポイント
（令和 6 年度は 15.5 ポイント）
- ・数学で 16.4 ポイント
（令和 6 年度は 14.7 ポイント）
- ・理科で 13.4 ポイント
（IRT スコアのため参考値なし）

【北海道の平均正答率を 5 ポイント以上、下回った学校数】

○ 小学校

- ・国語で 4 校（令和 6 年度は 2 校）
- ・算数で 6 校（令和 6 年度は 5 校）
- ・理科で 0 校（令和 4 年度 7 校）

○ 中学校

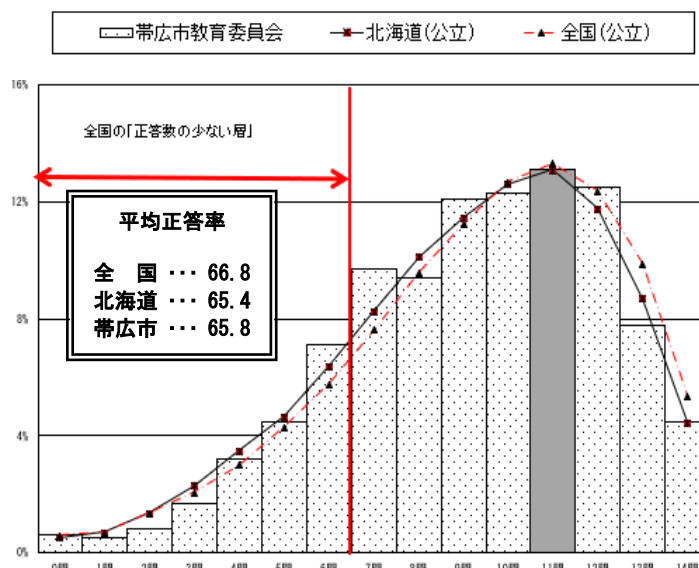
- ・国語で 0 校（令和 6 年度は 2 校）
- ・数学で 2 校（令和 6 年度は 1 校）

2 各教科の正答数の分析

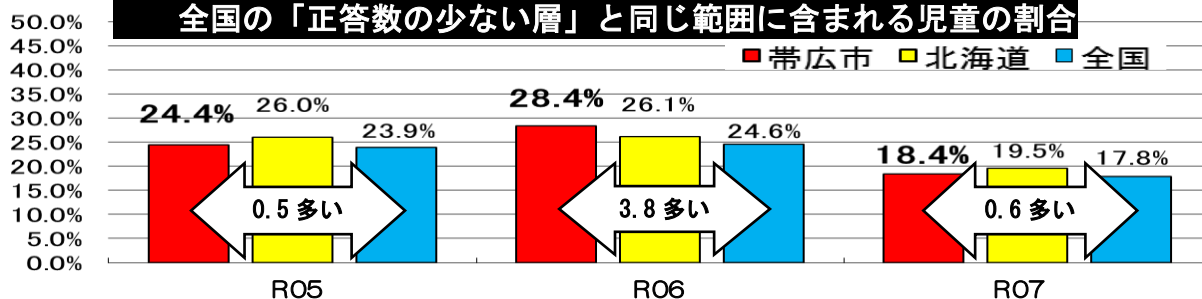
【小学校 国語】

・ 14 問中、正解した児童数が最も多かったのは、全国、北海道、本市とも 11 問であった。

・ 14 問中 12 問以上正解した児童の割合が、全国を下回る。



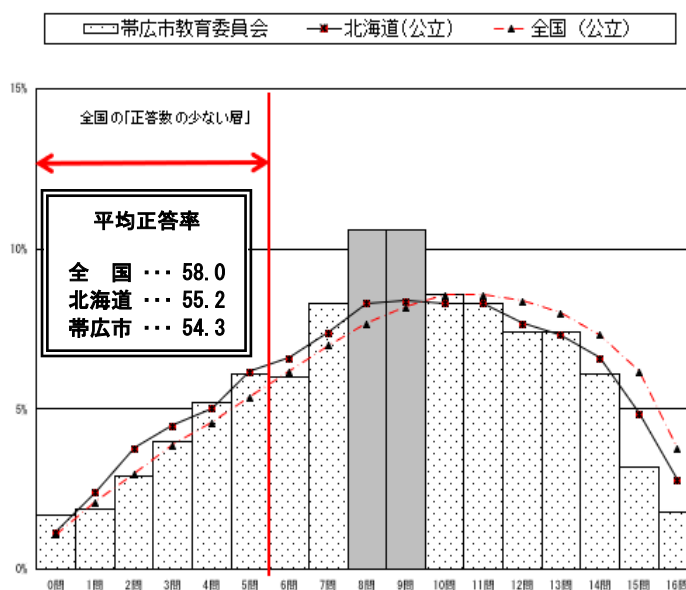
全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合



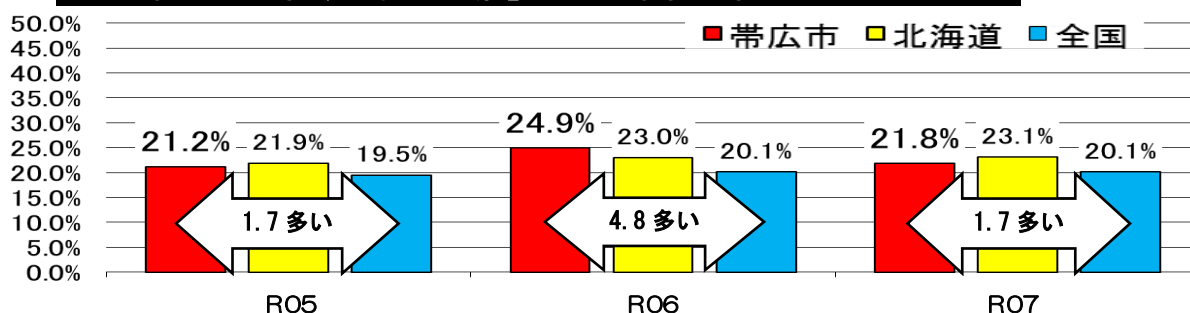
【小学校 算数】

・ 16 問中、正解した児童数が最も多かったのは、全国は 10 問と 11 問、北海道は 9 問、本市は 8 問と 9 問であった。

・ 16 問中 13 問以上正解した児童の割合が、全国を下回る。



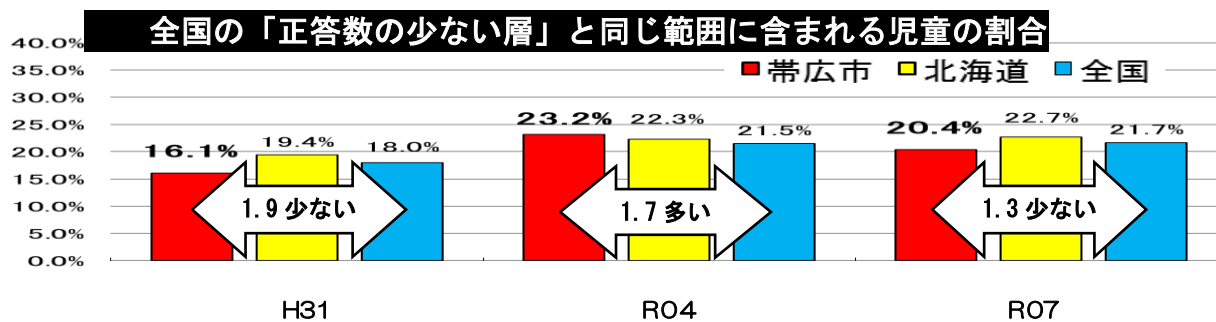
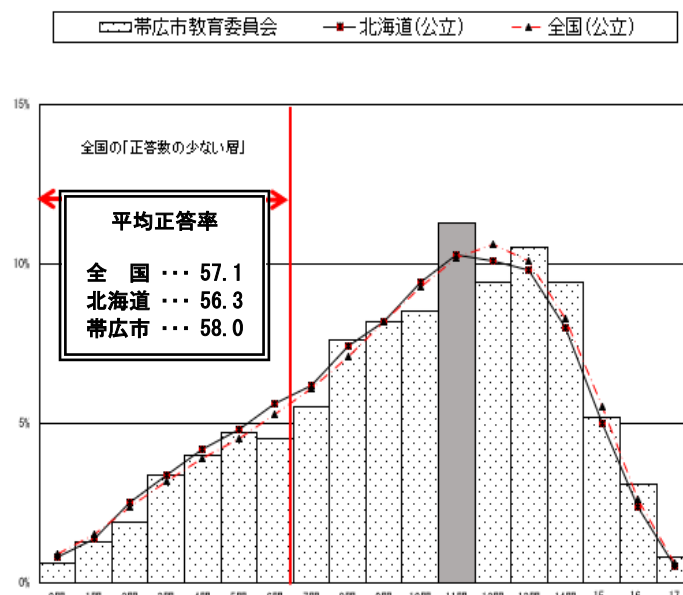
全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合



【小学校 理科】

・ 17問中、正解した児童数が最も多かったのは、全国で11問、北海道で 10 問、本市では 11 問であった。

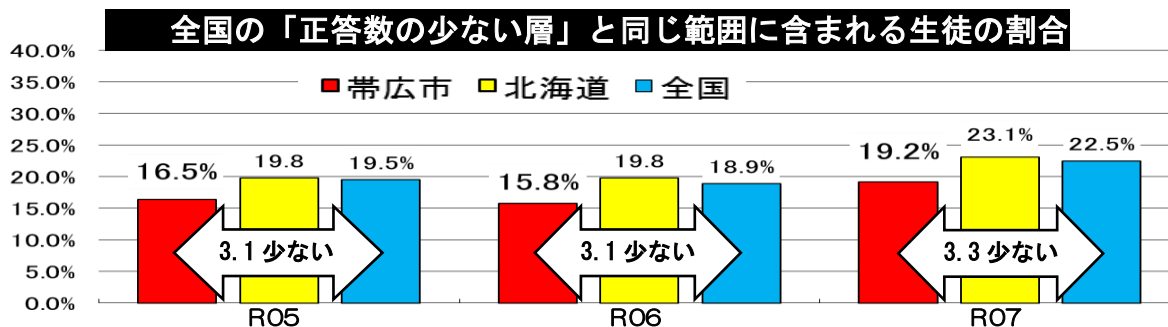
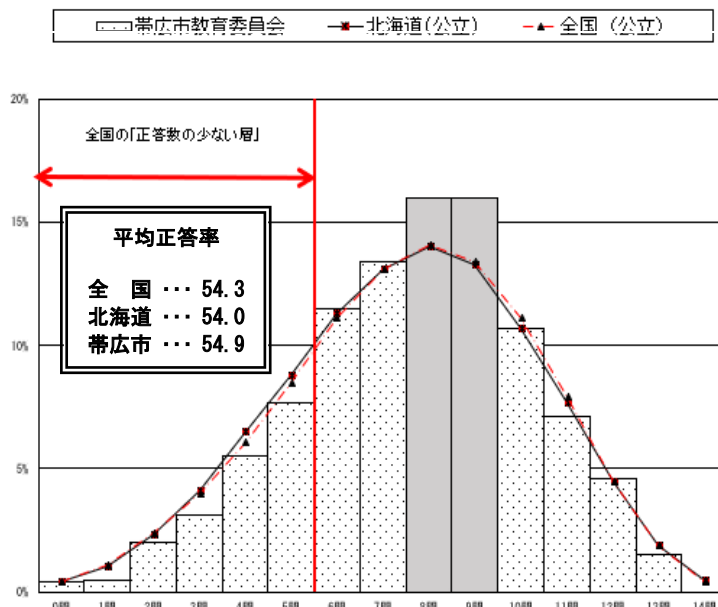
・ 17 問中 13 問以上正解した児童の割合が、全国を上回る。



【中学校 国語】

・ 14 問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国と北海道が8問、本市は8問と9問であった。

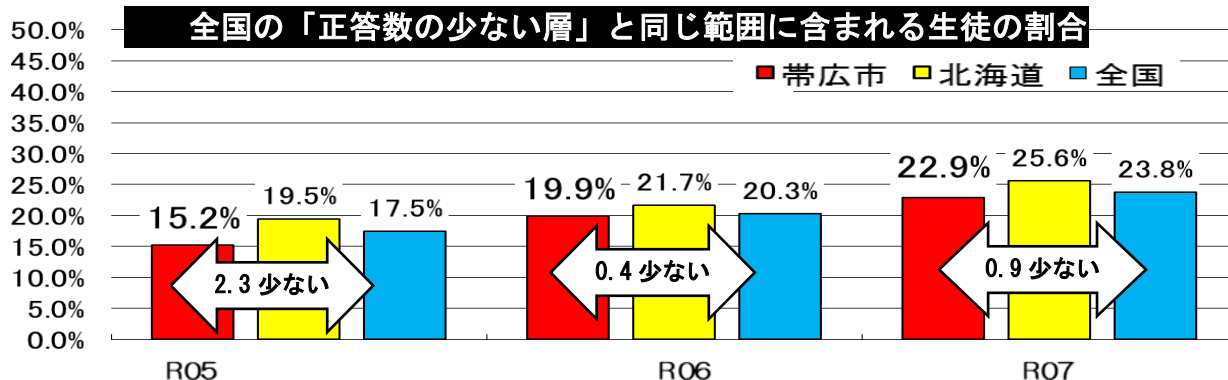
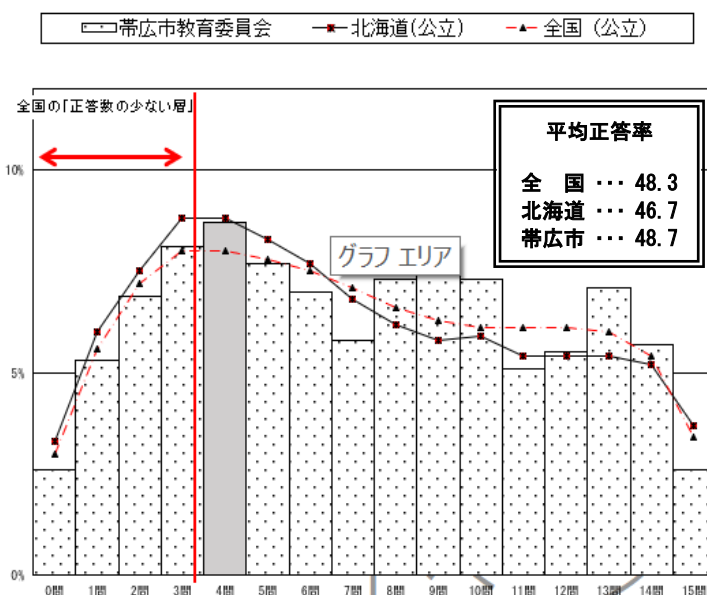
・ 14 問中正解が5問以下の生徒の割合が、全国を下回る。



【中学校 数学】

・ 15 問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国と北海道が3問と4問、本市は4問であった。

・ 15 問中正解が2問以下の生徒の割合が、全国と全道を下回る。



【中学校 理科】

IRT バンド分布グラフ（横軸 IRT バンド・縦軸：割合）

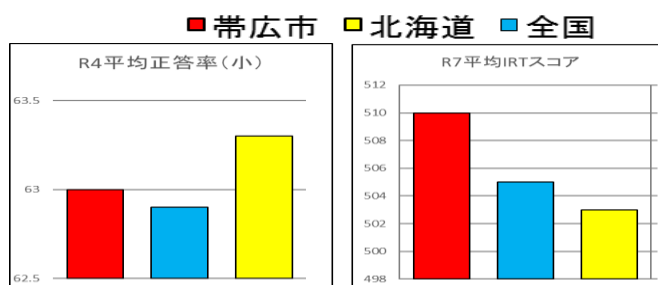
- ・平均 IRT スコアは 510 であり全国と比較すると+7 全国を上回った。
- ・IRT バンドの 1・2 の値が全国と比較すると少なく、3・4 の値が多く占めている。



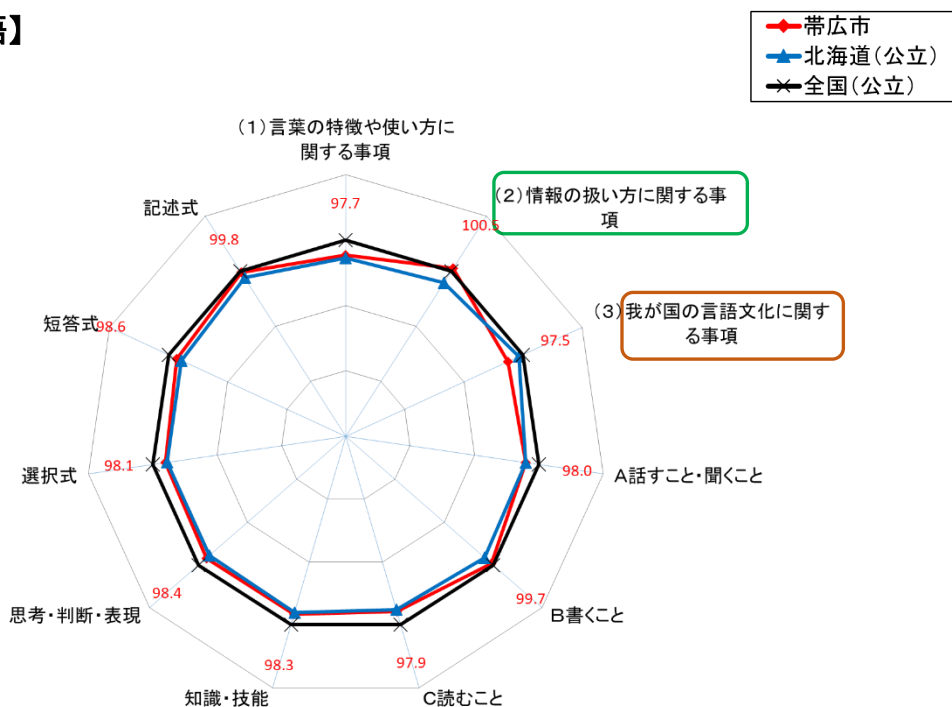
※IRT バンド：IRT スコアを 1～5 の 5 段階に区切ったもので、3 が平均バンド、5 が最も高いバンドとなる
 ※IRT スコア：IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500 を基準にした得点で表すもの

- ・今年度対象となった生徒の小学校 6 学年時の結果において、全国を下回っていたものの、今年度は、全国と全道を上回った。

平均正答率・平均 IRT スコアの比較



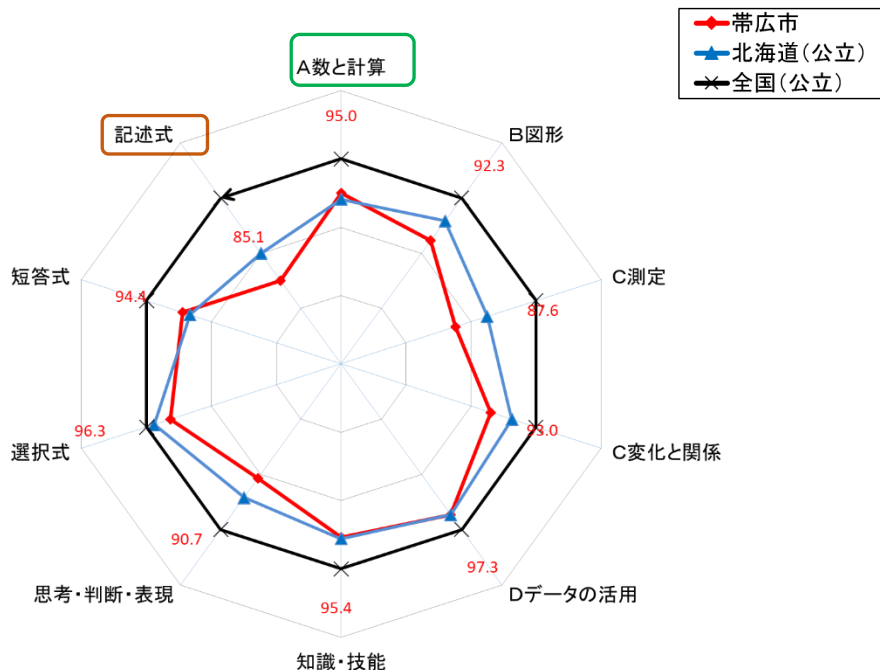
【小学校 国語】



※数値は「それぞれの平均正答率÷全国（公立）の平均正答率×100」で算出

学習指導要領の内容「情報の扱い方に関する事項」において成果が見られたものの、学習指導要領の内容「我が国の言語文化に関する事項」において課題が見られた。

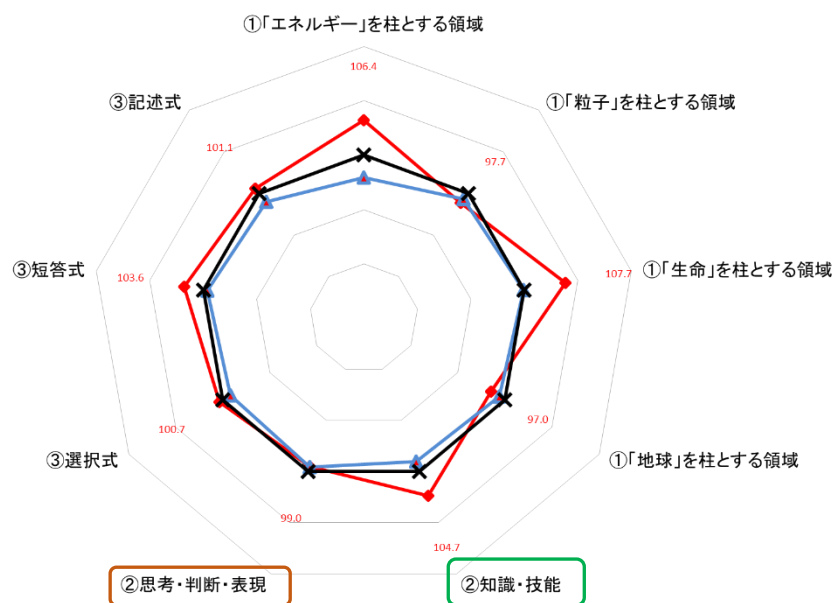
【小学校 算数】



※数値は「それぞれの平均正答率÷全国（公立）の平均正答率×100」で算出

問題形式「記述式」に課題が見られた。学習指導要領の領域「A数と計算」においては、依然として課題が見られるものの、全国との差が縮まった。

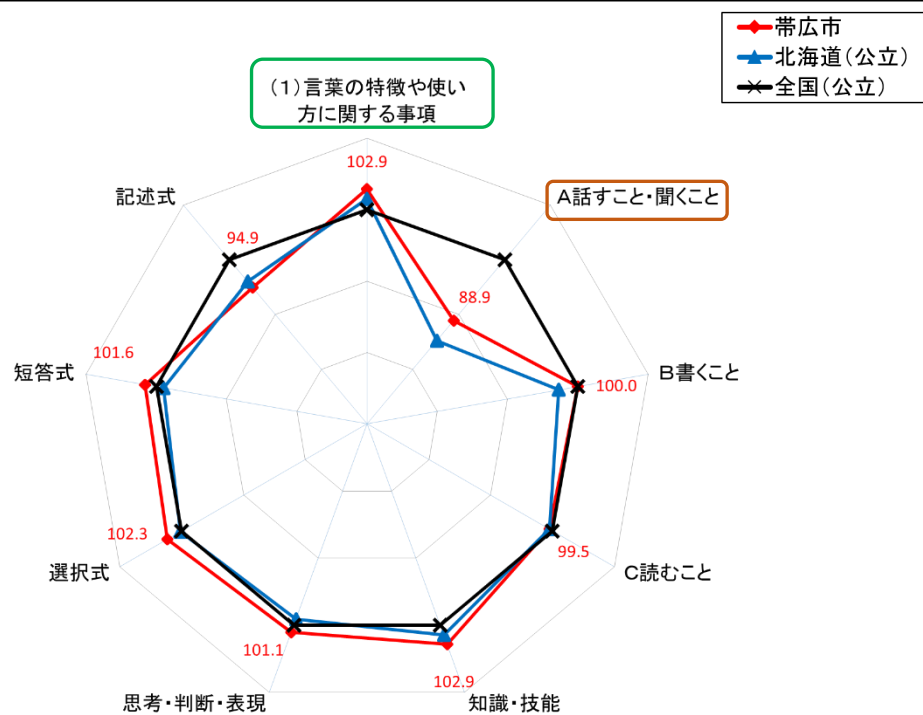
【小学校 理科】



※数値は「それぞれの平均正答率÷全国（公立）の平均正答率×100」で算出

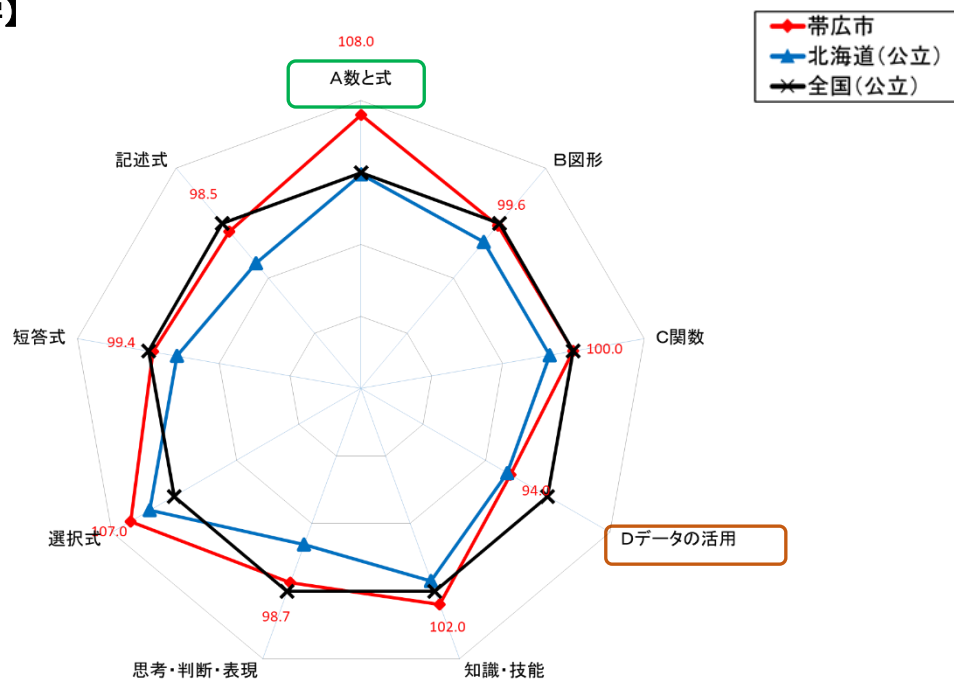
評価の観点「知識・技能」において成果が見られたものの、「思考・判断・表現」において全国を下回った。

【中学校 国語】



学習指導要領の内容「言葉の特徴や使い方に關する事項」に成果が見られたものの、学習指導要領の内容「A 話すこと・聞くこと」について全国の平均正答率を下回った。

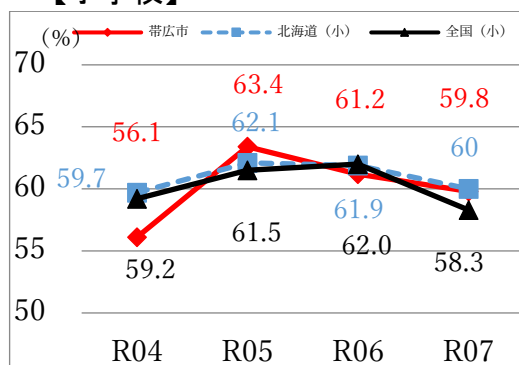
【中学校 数学】



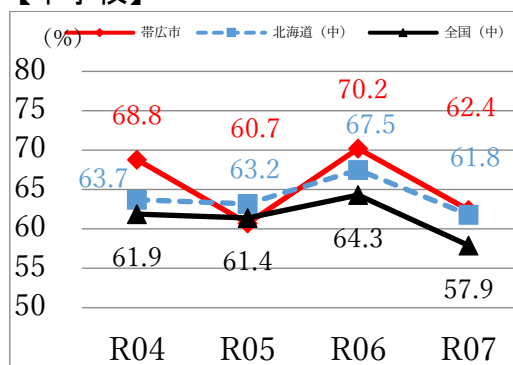
学習指導要領の内容「A 数と式」において成果が見られたものの、学習指導要領の内容「D データの活用」において全国の平均正答率を下回った。

4 児童生徒の学習状況の概観について

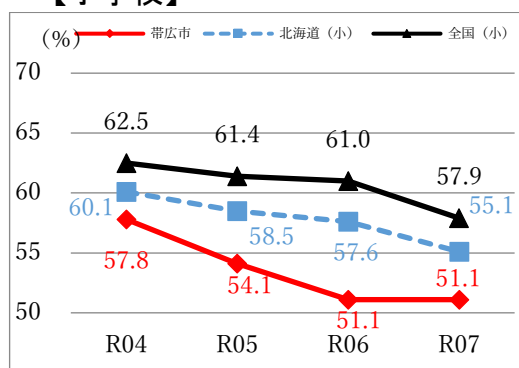
① 国語の勉強が好きな児童生徒の割合 【小学校】



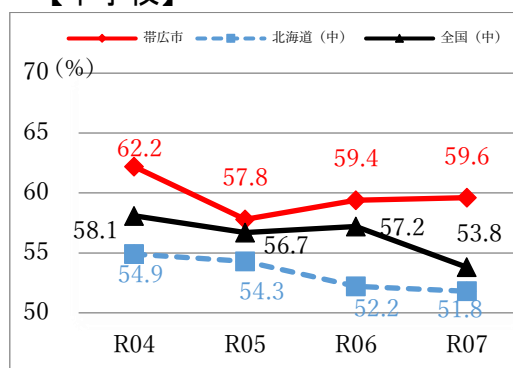
【中学校】



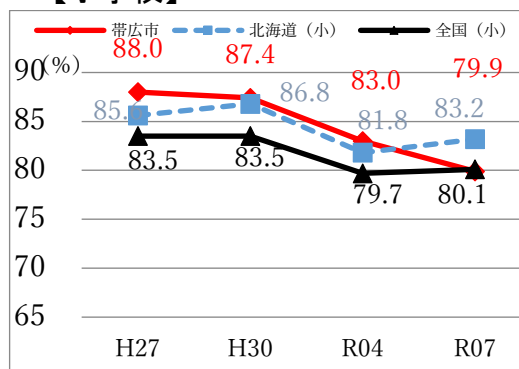
② 算数・数学の勉強が好きな児童生徒の割合 【小学校】



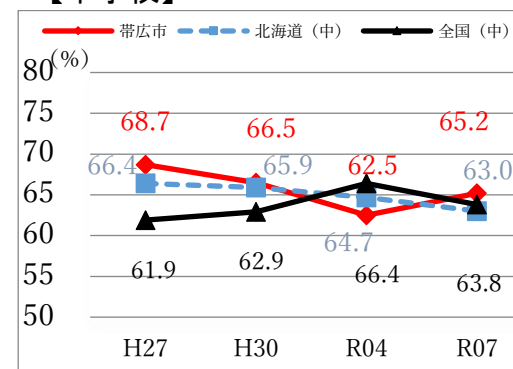
【中学校】



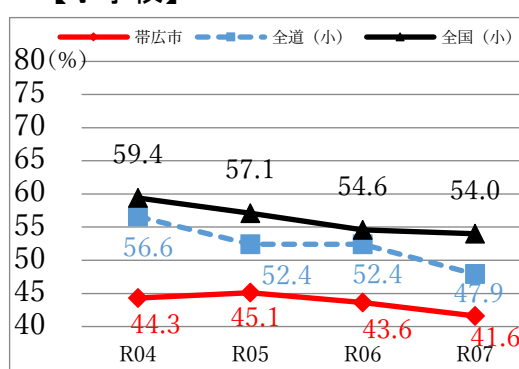
③ 理科の勉強が好きな児童生徒の割合 【小学校】



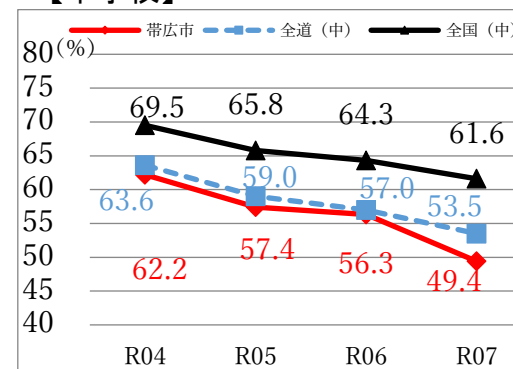
【中学校】



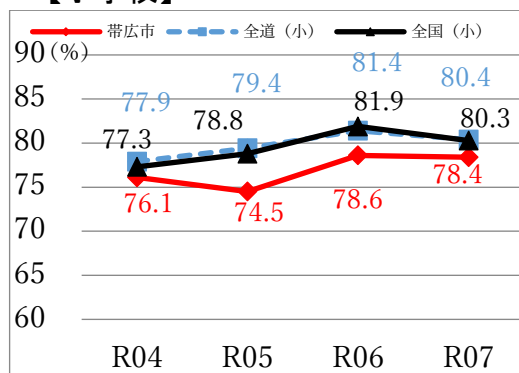
④ 普段（月～金）、1日当たり1時間以上勉強する児童生徒の割合 【小学校】



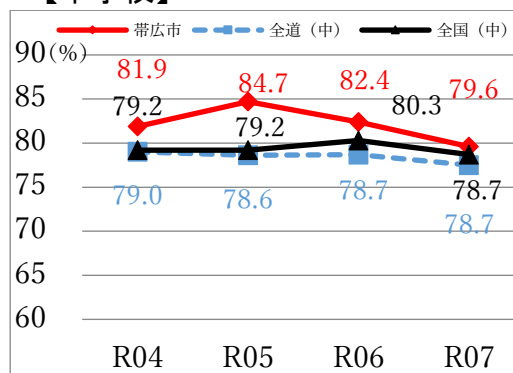
【中学校】



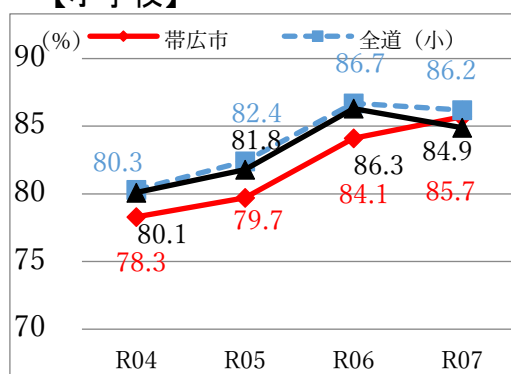
⑤ 課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思う児童生徒の割合
【小学校】



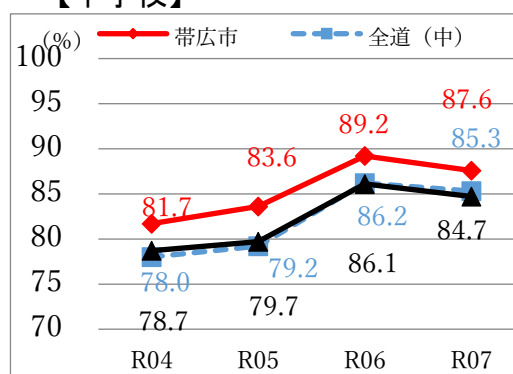
【中学校】



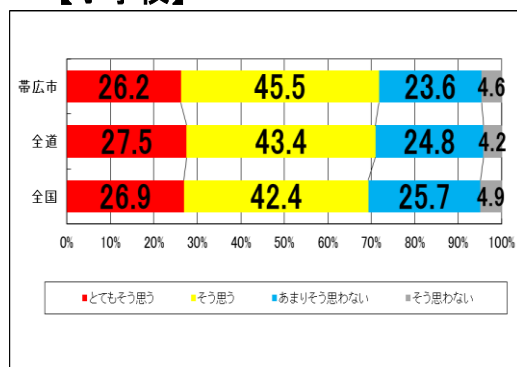
⑥ 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていると思う児童生徒の割合
【小学校】



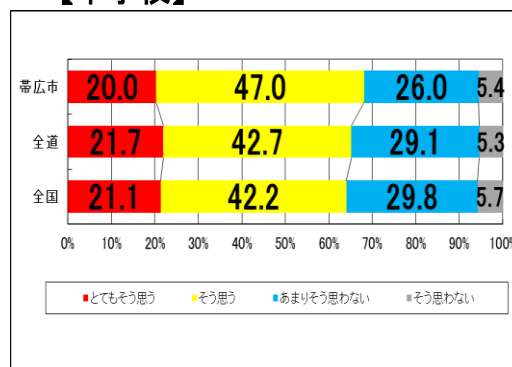
【中学校】



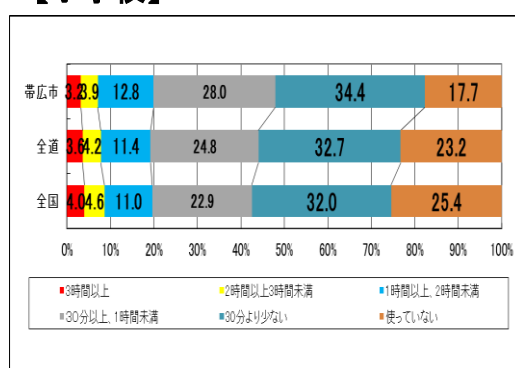
⑦ 学習の中で PC・タブレットなどの ICT 機器を活用し、情報を整理することができると思っている児童生徒の割合
【小学校】



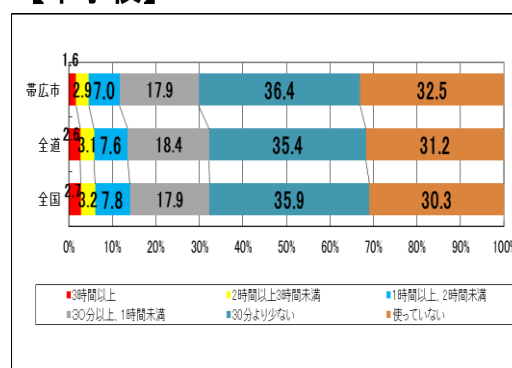
【中学校】



⑧ 学校の授業時間以外に普段（月曜日から金曜日）、一日あたりに PC・タブレットなどの ICT 機器を勉強の中で使っている児童生徒の割合
【小学校】



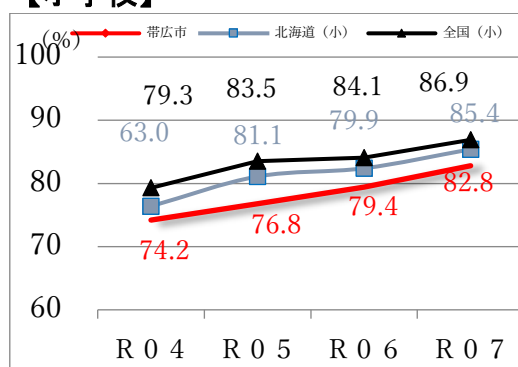
【中学校】



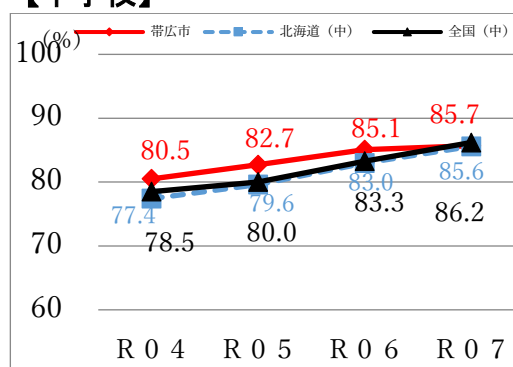
5 児童生徒のウェルビーイングについて

① 自分にはよいところがあると思う児童生徒の割合

【小学校】

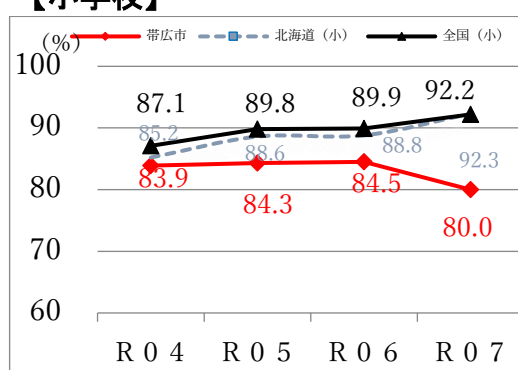


【中学校】

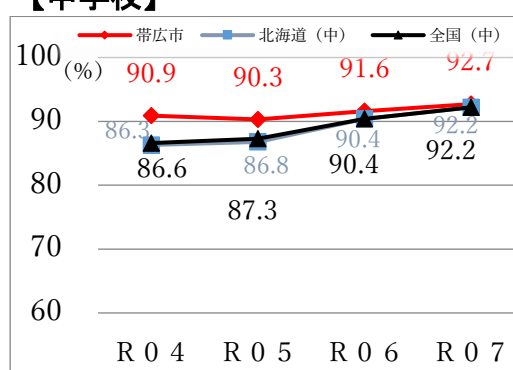


② 先生は良いところを認めてくれると思う児童生徒の割合

【小学校】

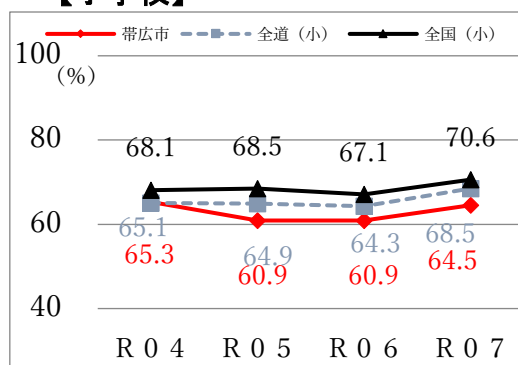


【中学校】

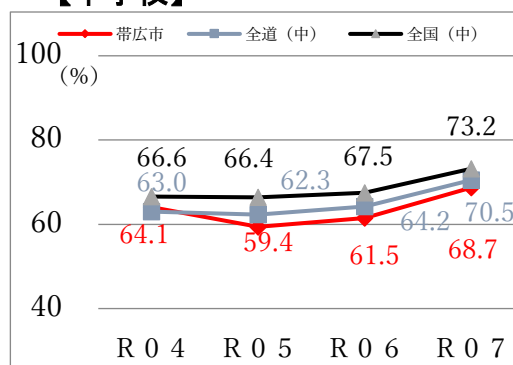


③ 困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できると思う児童生徒の割合

【小学校】

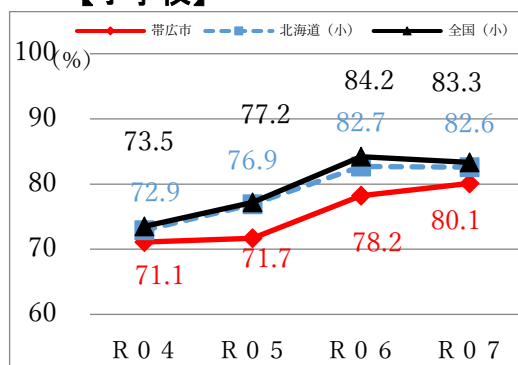


【中学校】

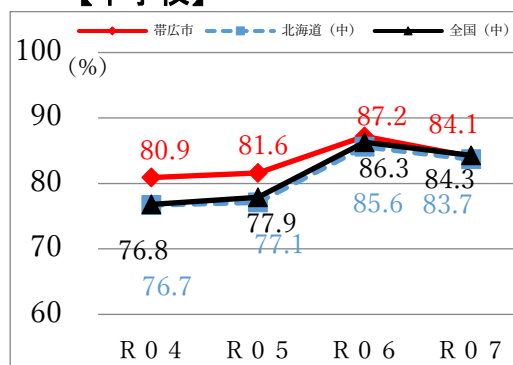


④ 学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思う児童生徒の割合

【小学校】



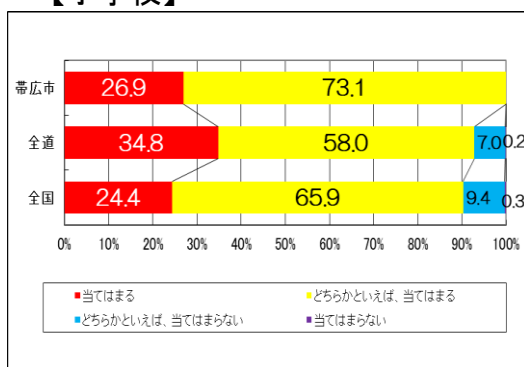
【中学校】



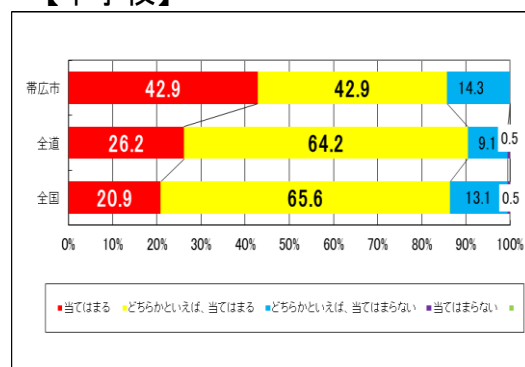
6 学校の学力向上の取組状況の概観について

① 熱意をもって勉強していると思う学校の割合

【小学校】

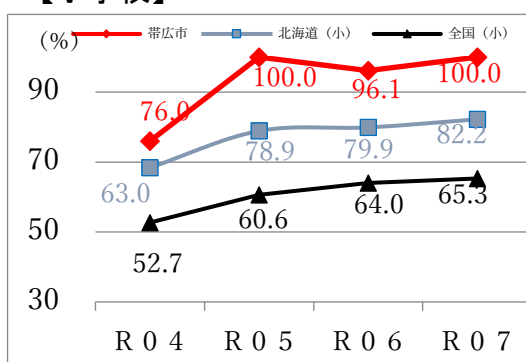


【中学校】

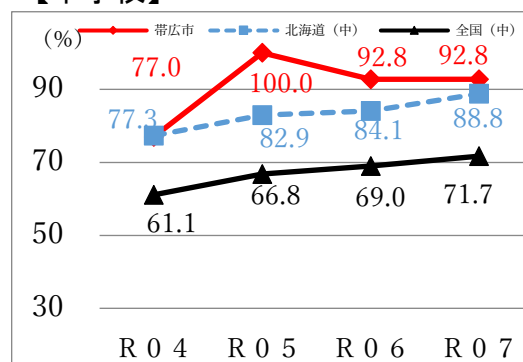


② 近隣校と9年間を見通した教育課程に関する共通の取組を「行った」学校の割合

【小学校】

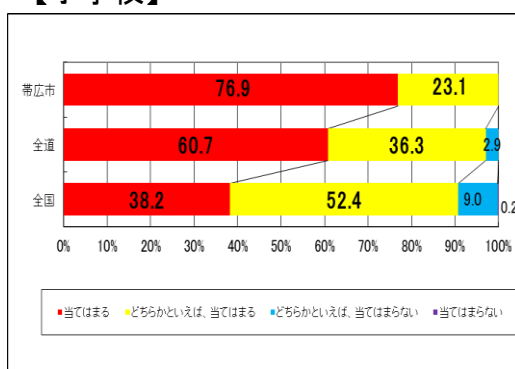


【中学校】

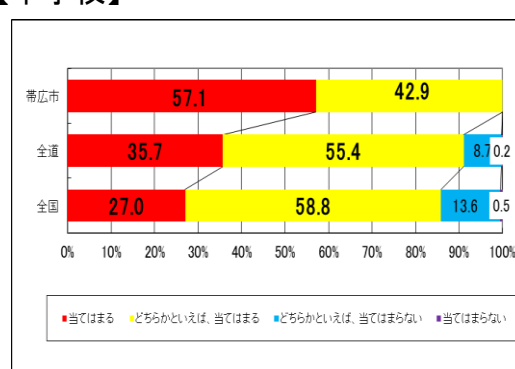


③ 家庭学習について児童生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行った学校の割合

【小学校】



【中学校】



7 考察

(1) 児童生徒の学力の状況

【小学校】

国語、算数において全国の平均正答率を下回ったものの、令和6年度と比較すると、全国の平均正答率との差が縮小した。理科においては、全国平均を上回る成果が表れている。

全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合において、国語・算数は全国より割合が多いものの、令和6年度と比較すると差は縮小し、理科については、全国より割合が少ない結果となった。

【中学校】

国語、数学、理科ともに全国の平均正答率及び平均 IRT スコアを上回る成果が見られた。

中学校の国語・数学においても、全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合が、全国比で昨年度以上に少なくなる結果となった。これらのことから、小中学校において全体的に低位層の割合が少なくなったことがわかる。

各学校において少人数指導・専科指導など指導体制の工夫により、きめ細かい指導を行ったことや、本市における学力向上推進プロジェクトチームの会議において、エリア・ファミリーごとに学力に係る課題を分析し、学力向上に向けたエリアでの共通実践を行った成果と言える。

(2) 児童生徒質問紙から

○学習意欲に関する質問項目について（令和6年度と比較）

【国語の勉強が好き】 【算数・数学の勉強が好き】

- ・「好き」と回答した割合は、小学校で減少傾向、中学校で増加傾向

【理科の勉強が好き】

- ・「好き」と回答した令和4年度の割合と比較すると、小学校で減少傾向、中学校で増加傾向

○家庭での学習について

【普段（月～金）、1日1時間以上勉強する児童生徒の割合】

- ・小・中学校ともに全国・全道より低い傾向

○授業について

【課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた】

- ・ 小学校は全国平均を下回った
- ・ 中学校は全国平均を上回った

【学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができている】

- ・ 肯定的な回答をした割合は、小・中学校ともに全国平均を上回った

○ICT 機器の活用について

【学習の中で PC・タブレットなどの ICT 機器を活用し、図、表、グラフ、思考ツールなどをつかってまとめることができる】

- ・ 肯定的な回答をした割合は、小・中学校ともに全国平均を上回った

【学校の授業時間以外に普段（月曜日から金曜日）、一日あたりに PC・タブレットなどの ICT 機器を勉強の中でどのくらい使っているか】

- ・ 30 分以上使用していると回答した割合が、小学校では全国平均を下回り、中学校では全国を上回った

○ウェルビーイングについて（令和 6 年度と比較）

【自分にはよいところがある】

- ・ 肯定的な回答をした割合は、小学校・中学校ともに増加傾向

【先生は、良いところを認めてくれている】

- ・ 肯定的な回答をした割合は、小学校で減少傾向、中学校で増加傾向

【困りごとや不安がある時に先生や学校にいる大人にいつでも相談できるか】

- ・ 肯定的な回答をした割合は、小・中学校ともに増加傾向

【学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている】

- ・ 肯定的な回答をした割合は、小学校で増加傾向、中学校で減少傾向

今後、子ども・教職員・家庭地域への広がり意識した「ウェルビーイング」を目指すためには、検証・改善サイクル確率のもと、教育の質の向上に向けた取組を客観的に分析することで、教職員が方向性を共有し、各学校の実態に応じた創意工夫ある実効性の高い施策へと深化させる必要がある。

その中で、子どもたちの「自分らしさ」が輝く学びの実現を強く意識し、一人ひとりの興味や関心、得意なことを尊重し、自ら課題を見つけ、解決する力を育む学習機会を創出するとともに、教職員は、自身の個性を活かした指導を実践し、子どもたちが「自分らしさ」を大切にしながら、他者と協働する力を育むための授業改善を推進する必要がある。

(3) 学校質問紙から

○「熱意をもって勉強をしていますか」

・肯定的な回答をした割合は、小・中学校ともに全国平均を上回った。

○「近隣校との9年間を見通した教育課程に関する共通の取組を行ったか」

・小・中学校ともに全国平均を上回った

○「家庭学習について児童生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行っているか」

・小・中学校ともに全国平均を上回った。

今後、各エリアにおいて家庭学習についての取組事例の共有を行うなど家庭と連携し、PC・タブレット端末等も効果的に活用しながら、児童生徒が自分自身で学習を自己調整することができるよう、今後の更なる取組の充実を図っていく。

8 改善の方策

以上の結果を受け、帯広市教育委員会では、本市の児童生徒の学力向上のための具体的な改善の方策について以下のとおり整理した。

- (1) エリア・ファミリーによる学力向上に係る課題解決に向けた共通実践の強化
- (2) ウェルビーイングの指標を反映させた実行性のある学力向上の取組
- (3) タブレット端末活用を含めた「家庭学習の充実」による学習習慣の確立

(1) エリア・ファミリーによる学力向上に係る課題解決に向けた共通実践の強化

本市が令和3年度より取り組んできた「1校1実践」、令和5年度よりエリア・ファミリー共通の実践を促してきた「エリア共通アプローチ」は、長年課題として挙げられていた「記述力」や学力の「伸びしろ層（低位層）」の減少等、一定の成果をあげてきた。具体的には、「児童生徒が自分の考えを整理し、文章としての的確に表現する力を育む取組」や、「振り返りの時間を十分に確保し、学んだ内容を自分の言葉で整理・再構築する授業展開」といった実践を通じて、学力の底上げと思考力・表現力の向上につなげている

したがって、今後も「1校1実践」や「エリア共通アプローチ」の一体的な充実はもとより、学力向上推進プロジェクトチームと連携しながら、効果のみられた分野に取組を焦点化して継続するなど、意図的な取組の設定が行われるよう進めていく。

(2) ウェルビーイングの指標を反映させた実行性のある学力向上の取組

質問調査の結果から、積極的に活用してきたICT機器の活用技能の向上や、対話的な学びを生かした学習活動の充実が本市の授業のよさといえる。一方で、教科が好きであるという児童生徒の割合については、依然として課題がみられる。教職員の資質向上はもとより、児童生徒が学ぶ意義や目的を感じることができるよう「子どもを主語」とした授業改善が一層重要となってくる。

今年度からウェルビーイングに関わる項目について分析を行っている。個人のウェルビーイングを支える一つの要素として学力があることをふまえながら、各学校においても、学力や学習状況と合わせて、児童生徒の主観指標を意図的に関連付けながら、子どもの思いや考えを受けとめる授業実践が展開されるよう学校教育指導訪問や公開研究会等を通して学校を支援していく。

(3) タブレット端末活用を含めた「家庭学習の充実」による学習習慣の確立

本市の児童生徒の家庭での学習時間は、全国と比較して少ない状況である。生涯にわ

たって主体的に学び続けることができるよう、家庭学習をはじめ学習習慣の確立、さらには、家庭学習の内容を自律的に決められるような段階的な指導が効果的に展開されるよう配慮していく必要があると考えている。

各学校では、ICT 機器が日常的・効果的に活用されてきており、家庭学習におけるタブレット端末の活用事例もみられるようになってきた。今後は、発達段階や目的に応じて、自律的に家庭学習が進められるよう体系的な指導に一層力を入れていく必要がある。

各学校において示されている家庭学習への取組方の資料を小・中学校間、または同校種間で共有、協議することを通して、成果と課題を共有するとともに、実効性のある取組の推進を支援していきたい。

以上、これらの取組が、全国学力・学習状況調査を軸とした、各校における「検証・改善サイクル」の確立を通して本市の児童生徒の学力向上・ウェルビーイングの向上につながっていくことを期待している。

9 おわりに

学校と教育委員会が積極的かつ継続的な取組を進める中で、児童生徒の学力向上に一定程度の成果がみられた。一方で、依然課題として残っている側面もあることから、今後も意図的・計画的に本市の施策、各学校の取組を検証し、一層の充実を図っていく。学力向上に資する取組を通して、「全ての子どもたちの可能性を引き出し、持続可能な社会の創り手」を育てるとともに、児童生徒や教職員の「ウェルビーイングの向上」につなげていくことを目指していきたい。

令和7年11月 帯広市教育委員会